

図書館今昔

さとう もとのり
佐藤 元状
(法学部教授)

慶應義塾大学で勤務を始めてから、もう十年を超える。学者の端くれとして蔵書の充実した図書館のある大学で仕事をできるのは、幸福なことだ。ただ大学、大学院と国立大学の古色蒼然とした図書館で勉学をしてきたので、Keio Media Centerという現代的な名称には、正直とまどった。慶應は図書館じゃないんだ、そう思ったことをよく覚えている。

でも、時間を重ねるごとに、そしてデジタル化の波が次々と押し寄せるごとに、Media Centerという名は、とても適切な名称に思えるようになっていった。いまや海外の新聞や雑誌は、電子ジャーナルで読む時代である。ひと昔前ならば、日本各地の大学図書館まで足を運んで、埃まみれの新聞や雑誌の関連記事をしらみつぶしに探し出し、黙々とコピーしたり、コピーを許されない場合には必死に筆写したりしていたのだが、いまではその資料さえ所蔵してあれば、データベースを使って、効率的に、手を汚すことなく、そして多くの場合は自宅から資料の収集ができる。メディア・センター万歳！

実際、Keio Media Centerのデータベースは充実している。イギリスの文学、映画、メディアの研究を専門にしているわたしのような研究者にとって、メディア・センターの蔵書は文字通り宝庫である。例えばThe Times, The Sunday Times, The Guardian. この三つのイギリスの高級紙のデータベースを使用すれば、どんな本だって書けてしまう。

タイムズ紙はイギリスの保守層の新聞であり、彼らの政治的な価値観を体現した新聞であるが、そのことを考慮に入れて読めばいい。イギリスの上流階級および上流中産階級の価値観のドキュメントとしてこれほど優れているものはない。そして、いまから見れば、その保守性に鼻がつくこともあるかもしれないが、記事のクオリティには文句のつけようがない。

サンデー・タイムズ紙はタイムズの日曜版であるが、イギリスの上流中産階級の社会的な価値観、行動様式を理解するのに、これほど大事な資料はないだろう。日曜版なので、社会面、

文化面の記事が充実している。例えば、ビートルズが活躍した1960年代にイギリス人が何を食べていたのか、どこへ旅行していたのか、どんな衣装を着ていたのか、データベースを使えばそんなことが写真資料とともに即座にわかる。

ガーディアン紙は、イギリスの中産階級のリベラル層を读者層とする高級紙で、わたしにとってはもっとも大切な新聞である。日本で言えば、朝日新聞のような位置の新聞だが、記事の質と量がまず違う。文化面、政治面、社会面すべて充実している。将来のマスコミ志望者には、ガーディアン紙を熟読して、先進国の濃密な新聞文化に身を晒してほしいと思っている。

イギリスの雑誌を一つだけ取り上げるならば、風刺雑誌のパンチ誌のデータベースは見ているだけでとにかく楽しい。イギリス人のユーモアのセンスはこの雑誌を読んでいるとすぐにわかるようになる。政治家から王室、警察と、ありとあらゆる権威を笑い飛ばす国民性は、ヴィクトリア朝以来の長い雑誌文化のなかで培われてきたのだ。

わたしはいま『グレアム・グリーン、ある映画的人生』という本を書き上げているところだが、これらの新聞や雑誌がなかったら、もっと退屈な本になったに違いない。

最後に新聞や雑誌のデータベースから、昔ながらの本に話を戻そう。本に関して言えば、物理的に場所をとるかもしれないが、電子化される本なんて割合から言えばほんの一部なのだから、すべてががんばって所蔵しておいてほしい。使われていない本ほど文化的な価値があるのだから、利用率が悪い本から処分するなんて野蛮なことはやめてほしい。そして、メディア・センターは時代の要求に応じて、適切な変化を遂げると同時に、どこかで昔ながらの図書館でいてほしい。他の誰かが数十年前に手に取っただけの本、誰にも読まれなかった日の目を見なかった本、ぼろぼろでカビだらけのペーパーバック。こうした忘れ去られたものとの出会いの場を提供することが、図書館の文化的な使命なのだから。